

短歌×写真のフリーペーパー「うたらば」

2024.07 vol.36

TAKE FREE

10円・100円

100円はおつりがでません
なお、10円の方が先に収納されます

■お話し中に次のカードを入口に
入れておけば続行で話ができる

1 2 3
4 5 6
7 8 9
* 0 #

カードの残り回数



■点灯したカードまたは
通話料を追加してください

カード挿入口

電話

今回のテーマ



短歌とは

5・7・5・7・7の5句31音のリズムで詠まれる短い抒情詩。
俳句で使われる「季語」は不要。
古くは奈良時代から身分の貴賤を問わず親しまれ、
現代でも日々の想いを綴る詩形として幅広い層に詠まれています。

一方で、その長い歴史を国語の授業で習うこともあります。
短歌とは難しいものである、と思っている人もしばしば。
このフリーべーぱーは「短歌をよく知らない人」に
現代短歌の面白さに触れていたくために作ったもの。
軽い気持ちで、ぜひページをめくつてみてください。

作品テーマ

電話

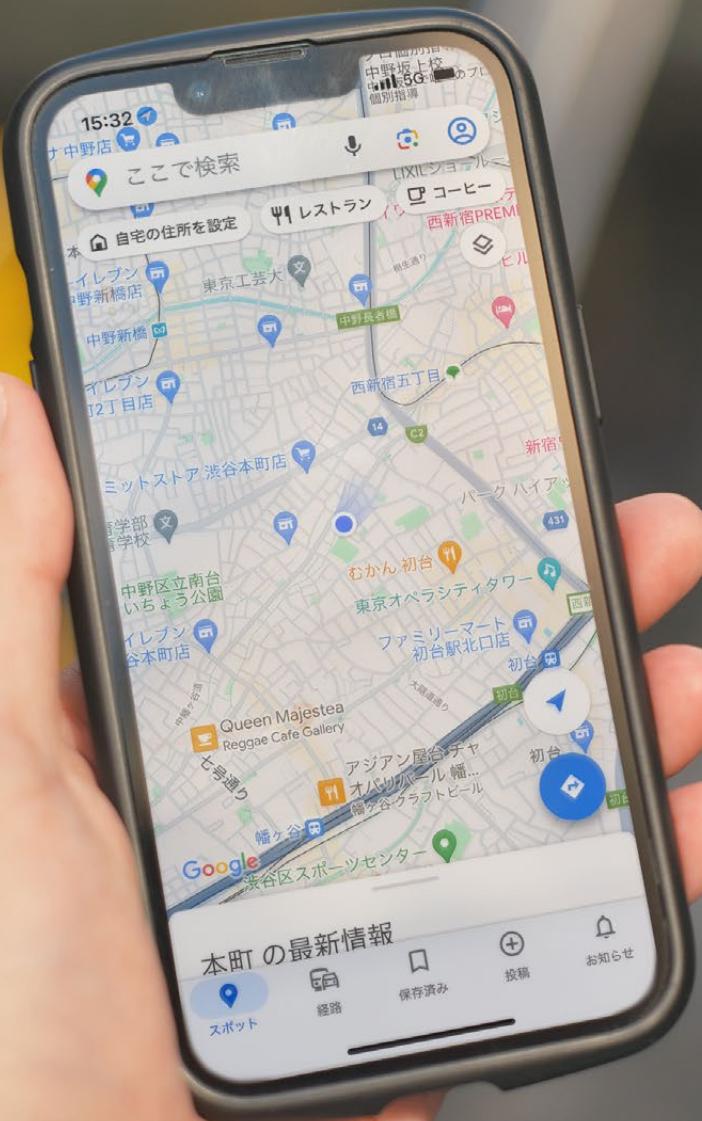


いつでも繋がっている
という現実が
ときどき不安を
生み出したりして



ぐるぐるとスマホ回しつつ立ち止まる

Google マップの中で踊つて



短歌：古川 格



朝8時50分ごろ母さんは

電話で謝るわたしのために

罪悪感が
押し寄せるから
腕を抱えて
うずくまる朝

人生が
幸せさがしの
旅だとしたら
今日もただしく
旅をしました

内線をつなぐ合間に上げた眼で
窓の向こうに虹を見つける



やさしさを
守るということ
すべてに過去が
あるということ

マスターはクロスでみがく
黒電話がただの飾りになつてもずっと



当たり前だと
思っていても
誰かにとっては
特別かもね



令和産10円玉の武勇伝

「公衆電話の中を見てきた」

佳作集



電話

書き置きにある筆記体の「Tel」の尾がきゅるんと跳ねてる金曜の午後／吉田冬扇

私から切るのを待つていてくれたあなたの部屋の雨がきこえる／佐藤千夏

糸電話たがいに耳に当てていてふたりはやさしすぎたのだろう／丸瀬まる

ミュートしてあくびをひとつ吐き出して 励ますのにも体力はある／堀優季奈 文字だけでわからなかつたおやすみの温度が耳に残つている夜／文野やよい

電話中お辞儀を何度もするひとが残業中に差し出すパピコ／十条坂

難解な映画だつたが長電話する口実になつてよかつた／ふうらい牡丹

用のないことはしだいに気がついて相槌ばかりの母の電話／葉月ままで

夜中にはかかるわけない母からのLINE通話に覚悟を決める／麻数

「もしもし」と受話器をとつてわたくしは御社惑わす新入社員／石川真琴

一本のバイクの音が埋めていく君と私の通話の沈黙／友常甘酢

駅前に十円玉を握りしめあの箱の中で青春してた／こにしのうせい 故障したカードの差し込み口のまま半年になる公衆電話／ふじはる 距離をとりびんと張らねば話せない糸電話のよう母との電話／古澤茅世加 語呂あわせ覚えた君のナンバーは今も私の海馬を泳ぐ／サトミ

数々のドラマを彩つてきたはずがいまはしづかな公衆電話／kuu 端末に心の裡を吐き出せば検索結果に「いのちの電話」／睡眠愚息

「話すことべつにないんだけどさ」つてくれた電話で二時間笑う／関根裕治 電話では見えないものの正座して話してくれているような声／樹枯井戸

GO！GO！郷ひろみみたいな語呂だった昔の彼の電話番号／鴻池舞香





ずっと心に
打ち寄せている
波があること
君がいること

貝のごと閉じたガラケーに耳を当て

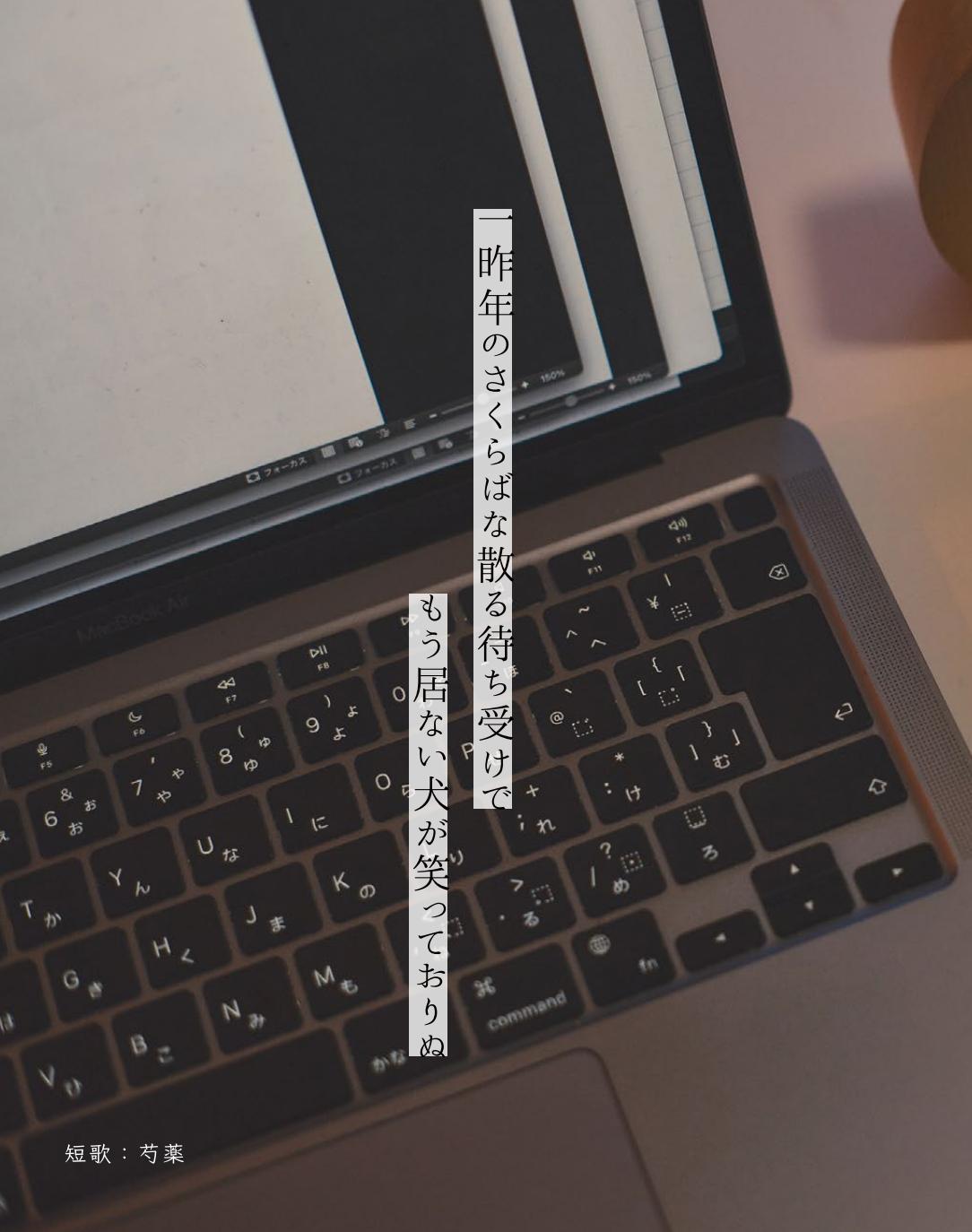
君が残したさざ波を聞く



大地と空に
見守られながら
生きているって
忘れるどこだった

電源が切れてはじめて気がついた

ひつじ雲いとかろやかな午後



短歌：芍薬



薄れる記憶を
つなぎとめる
記録がここに
あってよかった



あの頃は居間にしか電話がなくて

青春なんかどこにもなかつた

茶化されながら
照れながら
早口で切る
君との電話

短歌：泰源



ほんの数秒
呼吸を止めて
浮上の合図を
待っていました

メロディが鳴り止んでから声がするまで

この部屋は深海にある

真夜中の無人の道で青信号
ちやんと待つての時間が好きだ

(牧角うら)

誰も見ていない状況でも、自分のことは自分が見ている。そんな感覚で丁寧に生きる主体に好感が生まれる作品です。10年前のうたらば採用歌に「深夜だし悪いこととかしたくなり赤信号に変わるのを待つ(きつね)」というものがあって、信号の色は違うのに、どちらも主体が「すごく良い人」であることが伝わる点が共通しているのが面白いと感じました。

高校であこがれていた青春
は色のないままもう受験生

(西川

叶望)

作品が詠まれた時代の世相が反映されるという側面が短歌にはあります。コロナ禍における高校生のリアルな感情が凝縮されたこの作品は十年後に振り返ったときに特に意味を持つ一首になると予想できます。青春になるべき時間を奪われた世代がアフターコロナでどんな生き方を選ぶか。それもまた短歌として読んでみたいテーマです。

空の字が穴かんむりと知つてから落ちてみたいと思う
青空

(風花雪)

「空」が「穴かんむり」であるという再認識と空に落ちるという発想が素敵でした。「吸い込まれるような青空」と表現されることはありますが雲ひとつない青空をじっと見つめていると焦京の合わなくなるような感覚とはまた違う爽快感を伴うような印象が「空に落ちる」という表現にはありました。

この町の心臓としてパン釜に火がはいること 朝を始める
(十条坂)

描かれた景の描写がとても美しくて惹かれ他作品。自分からは少し離れた場所でのことに想いを巡らせて、自分にとっての朝が始まる様子は、谷川俊太郎の「朝のりしー」の詩にも通じるものがあります。「町」「心臓」「パン釜」「火」と少しずつズームしていく中で、「朝」と開ける流れが結句の伸びやかさを強調しています。情緒面も技術面もとても優れた秀作です。

くつを脱いで入るタイプの店だからあきらめた強盗も
いるだろう

(たろりずむ)

そんなことはないと思いつつも、もしかするとあるかもしれない気がしてくる。シーン選びが絶妙だからこそ、読者の意表をついて心を動かせる作品となる良い例ですね。強盗が押しに入る店を検討するときに、「ここは靴を脱いで入る店だからダメだ」と諭説している画が思い浮かび少し笑いました。



読む。

「月刊うたらば」より
文・田中ましろ



変わつたと思われるのはいやだから祖母の前ではジーパンと呼ぶ

(早坂つぐみ)

ジーンズと呼ぶか、デニムと呼ぶか、ジーパンと呼ぶか。ファンション用語は時代によつて呼び方が変わるという着眼点がお見事です。昔はみんなジーパンでしたよね。同じ話でズボンかパンツかといふ議論もあつたりして。祖母に寂しさを感じさせたくないという孫としての優しさにも共感が溢れる一首です。

耳たぶに散らばる穴に触れてみてきみだけにある星座とおもう

(中山史史)

ピアスホールは時間が経つてもなかなか閉じないもの。耳たぶに開いた穴はその人の歴史で、その時間的な把握が「星座」という言葉とうまくマッチしています。神话などに紐づくエピソードを持ち合わせる「星座」に「触れ」るという行為は「きみ」の持つ過去に触れるという行為でもあって、そこに主体の小さな覚悟のようなものも感じとりました。

そういうえべ「アディオス」
に似た「ありがとうございま
す」だつた店員の声
(新道拓明)

早口で伝えられる「ありがとうございまます」は「あざっす」や「あたーす」などいろんな響きで表現されますが、たしかに「アディオス」もそれっぽい納得感があります。お店から出る際に伝えられた「ありがとうございます」であれば「アディオス」だったとしても意味的に全く間違つてなくて、その事実に後から気付いたから「そういえべ」だつたんでしょうね(笑)

じやんけんは勝負の前に全員でいちど輪になる瞬間に全
員好き

(閑根裕治)



じやんけんをするときの「最初はグー」を「輪」と捉えているのだと読みました。何気ない生活のワンシーンから読者をハッとする気付きを掬い上げた作者のセンスが光る作品。「いちど輪になる」と言われるとじやんけんがとても平和なも

のを見えてきますね。

「月刊うたらば」では、いつでも作品を募集しています。毎月変わる投稿テーマにて、短歌作品をぜひお寄せください。今月のテーマは「うたらば」公式サイトをチェック→

短歌募集中

皆さんとよばれてしばしこなになる社長の知らぬわたの名前

(紡ちさと)

会社で社長が直々に挨拶をする場面。「皆さん」と連呼する社長を見ているときにふと「皆さん」が「ミナさん」に聞こえてきた、という感じでしょうか。些細なことでもツボに入ると妙に笑えてしまう。それが笑ってはいけない状況だけれど、こう大変。日常の扱い上げ方にセンスの光る作品です。

A close-up photograph of a hermit crab with a patterned shell crawling across a light-colored, sandy surface. Small, irregular stones and pebbles are scattered around the crab. The background is blurred, suggesting a coastal environment.

ノイズキャンセリング機能が優秀で

あなたに届かない波の音

大事なことほど
伝わらなくて
言葉じゃすべてを
言い切れなくて



編集後記

大変長らくお待たせいたしました…！気がつけば7ヶ月ぶりの発行となってしまい大変申し訳ありません。前号を出したあと4ヶ月間ほど、私が他の展示に出展する作品の制作に集中していたのが原因でございます。おかげでそちらも良い作品になったのですが、一人で運営している这样一个時に投稿者の皆様にご迷惑をおかけする形になるのだなと猛省しております。

次の号も投稿締切済みですので急いで次号も制作して通常運営に戻せたらと思っていますので温かく見守ってやっていただけますと幸いです。今号が時間優先でモデル出演なし、連作なしの簡易版なのも少々寂しいですし、このあたりも通常ベースに戻ったら再開したいと思います。何はともあれ最後までお読みいただきありがとうございました。今後ともよろしくお願ひいたします～！

企画・写真・詩・デザイン
田中ましろ

うたらば vol.36【電話】 2024年7月12日発行

○企画・撮影・編集 / 田中ましろ X @tnkmsr_photo

○短歌 / 投稿者の皆様

X @utalover 球 https://www.utalover.com/

短歌は
もつと
自由になれる

音